

北海道北広島市「大蛇神社」伝説の考察

阿部 敏夫

はじめに

「大蛇神社跡」碑は現在北広島市北の里渡辺忠宅の庭内にある。その形状は高さ一三五・五cm、横一五〇cmで平成十年九月に建立された。正面は当時の首長が「大蛇神社跡」と揮毫し、背面は碑建立の経緯が記されている。この神社にまつわる話は次のような内容である。

旧広島村に入植した武右工門はうっそうと茂る原始林を切り倒しながら開墾に精を出していた。樹齢数百年のタモの大木を切り倒したその夜、寝ている枕元に長い黒髪の女が現れ、「火を消してください。」と武右工門に頼むのだった。しかし、算段通り切り倒して焼き払った。四日間同じことを言いながら女は枕元に現れたが、その容姿は老婆のようになり、最後には白骨同様な姿になって頼むのだった。火は七日七晩も燃え続けて消えた。そしてタモの木の洞を見ると大蛇の白骨死体があった。武右工門が祟りを恐れて供養したのが大蛇神社の始まりであ

る。しかし、その後武右工門の家族やその土地の次の所有者の家族にも原因不明の不幸が重なったというのである。古い師や神主にお祓いしてもらったら、何事も起こらなくなったというのである。

この伝説は一八九六年(明治二十九)岸本トモ(当時九十三歳)(『郷土研究広島村』第一号一九六七年(昭和四十二))に掲載された)が語ったことに始まる。当初は「蛇の神社」と呼ばれていたが、その後「大蛇神社」と呼ばれるようになり、近辺の人達が祠を作りお参りしていた。そして、地域の郷土史家・図書館関係者等によつて写真集、紙芝居、郷土絵本、郷土史等に次々と伝承されて今日に至っている。この伝説の背景には、蛇や蛙等を「動物を」生殺しにはいけない。」という俗信(禁忌)伝承もある。また、大蛇供養以後の家族の不幸は肺病と呼ばれていた病気が本当の理由であつたらしい。

上記のことから口承文芸―民間説話（この場合は伝説・俗信等）は常に創り出されているということがわかる。従って、「口承文芸研究のこれから」を考える時に短い期間（百年位）に地域の郷土史家・図書館関係者等によって創造されてゆく口承文芸をも含めて考えなければならないだろう。

私は以上のような課題意識で第一章では、現在までに刊行されている「大蛇神社」に関する書籍・郷土史研究会機関誌・紙芝居・観光ガイド誌を年月順に整理した。同時に、前述の話の内容と重複する部分があるが、伝説の内容（モチーフ）を考察した。第二章では、伝説誕生の背景、第三章では、広報誌・新聞紙上に掲載された記事を年代順に整理した。また、紙芝居の〔画像〕についても考察した。そして、最後に今回の伝説考察・課題のまとめを行った。

第一章 伝説「大蛇神社」について

第一節 関連文献一覧

下記のように現在まで書籍、研究会機関誌、紙芝居等が〔二一〕刊行されている。年月順に整理すると以下のようになる。

〔二一〕『郷土研究 広島村』第一号 広島村郷土史研究会 広島村考古学研究会開村八〇周年 山本優編集 五〇頁 二六cm

昭和四十二年「一九六七」一月（二二頁）

〔二二〕『郷土研究 ひろしま』第三号大谷義明編著 広島町郷土史研究会 広島町考古学研究会

昭和五十二年「一九七七」五月 五七頁（五頁） 二六cm

〔二三〕『写真でみる広島のおゆみ』広島町役場 昭和五十九年「一九八四」一八五頁（二四一頁）三〇cm

〔二四〕『郷土大型紙しばい』（*大人の絵 昭和五十九年「一九八四」五五×八〇cm 九枚

〔二五〕『北の語り』創刊号 加藤芳江著 北海道口承文芸研究会 一九八五年「昭和六十」十二月 五一頁（三九頁）二二cm

〔二六〕『あの世からのことづけ』松谷みよ子著 一九八四年「昭和五十九」十二月 二〇二頁（一五一頁）二〇cm

〔二七〕『研究 郷土史ひろしま』大谷義明編著 広島町郷土史研究会 昭和六十一年六月 二七四頁（八〇頁）二二cm

〔二八〕『北の語り』第三号 北海道口承文芸研究会 一九八八年「昭和六十三」一月 一二六頁（六四頁）・木村正雄著「大蛇神社異聞」二二cm

〔二九〕『北海道昔ばなし』道央編 北海道口承文芸研究会 平成元年九月 一三八頁（七一頁）一五cm

〔三〇〕『郷土の歴史ガイド ひろしま歴史散歩』広島町教育委員会 平成四年「一九九二」三月 六六頁（三三頁）一八cm

〔三一〕『北の語り』第八号 北海道口承文芸研究会 一九九四年 一月 一二五頁（七一頁）二二cm

〔二二〕『北海道おどろおどろ物語』合田一道著 函館・幻洋社

平成七年「一九九五」八月 二九〇頁（五六頁）一七cm

〔二三〕『郷土絵本づくり（採話）』（*テープ有り）聞き手坪谷京子 平成七年「一九九五」

〔二四〕『郷土研究 ひろしま』広島町郷土史研究会（合冊・創刊号〜第八号）大谷義明編著 文楽館 平成八年「一九九六」五月

〔二五〕『郷土の絵本2 だいじゃ神社』北広島市教育委員会編 発行 平成八年「一九九六」九月

（*紙芝居も兼用）原画十七枚 三八×五四cm

〔二六〕『郷土誌「北の里のあゆみ」』郷土誌編集委員会 一九九六年「平成八」九月 一五三頁（二六一頁）二二cm

〔二七〕『きたひろしま歴史散歩（改訂版）』北広島市教育委員会 平成八年「一九九六」十一月 六八頁（三四頁）一八cm

〔二八〕『北広島のあゆみ』札幌・弘文社 平成八年「一九九六」十二月 八六頁（六七頁）三〇cm

〔二九〕『郷土紙芝居 一話 きたひろ昔あったとさ』北広島市図書館 ゆずり葉の会（*解説書・大筋）平成十五年「二〇〇三」八月

〔三〇〕『写真でみる北広島のあゆみ』（開村一二〇年 北広島市 弘文社 平成十六年「二〇〇四」一月 一八五頁（一四九頁）三〇cm

〔三一〕『郷土研究 北ひろしま 新版 碑は語る』第十八号

大谷義明編著 北広島郷土史研究会 平成十七年「二〇〇五」十二月

第二節 伝説内容の考察

第一節の「二二」項目の伝説内容のモチーフは、いくつかのバリエーションを含みながら次のようになる。

- ①語り始め―語り手の紹介
- ②一〇〇年前、入植地に大きなタモの木があった。
- ③タモの木を焼き払う。
- ④その晩、武右工門の夢枕に女が立ち、「火を消してください。」と言う。
- ⑤その女は三日間夢枕に立ち、四日目は骸骨姿になって現われる。
- ⑥不思議に思った武右工門は木の洞を見ると焼け焦げた骸骨の大蛇を発見する。
- ⑦大蛇を可哀想に思った村の人は祠を建てて供養した。この祠を「蛇の神社」「大蛇神社」と呼ぶようになった。
- ⑧その後、武右工門は不幸が続いて村を離れた。
- ⑨新たに入植した人も牛や馬が病気になるって死ぬ不幸が続いた。
- ⑩村の人は「大蛇神社」のことを思い出して改めて供養した。
- ⑪その供養のおかげかその後は牛や馬が無事生れ、生活も豊

かになった。

⑫語り納め—大蛇は龍になって、天に昇った。

「二」の岸本トモ談がこの伝説の発端である。「二」はモチーフ⑦までの話である。大蛇を焼き殺した行為が可哀想で供養したという慰霊話で終っている。慰霊話は、岸本トモが語った「久保はその芥山に火をつけた処約一週間に亘って燃え続けた。四日目頃から今迄赤く燃え続けていた火が青い火になって燃え続けた。……」という部分が山田甚工門の話も加味して詳しく記述されるようになった。「二」、「三」の大谷義明氏の再話や「四」、「二五」の(大型)紙芝居では、夢枕に立つ女の容貌が日毎に変化して行く様子が詳しく記述されている。大蛇の骨の効用、大蛇と龍(三千年の修業の結果云々……)の関係等も記述されている。一方、モチーフ⑧以降の話を記述している伝説もある。「三」、「二二」、「二三」、「二五」、「二八」、「二二」の話が該当する。改めて供養した結果、生活も豊かになったという感謝話になっている。「二五」の小学生一六人が制作した紙芝居の後半部分や「二二」の石碑文に再話者の思いが表れている。特に「二二」の石碑を建立した渡辺忠氏は後のことを考え、大理石を使用し、て永久に顕彰しようとした。そして、これらの活動が図書館関係者や行政の街づくりの一環として位置付けられるようになった。

第二章 大蛇神社伝説の生成の背景

第一節 移住時の状況

『郷土研究広島村』第一号に酒井喜重氏が「村の先駆者たち」(二八頁)の部分に北海道・現北広島市入植移住時の様子を以下のように記述している。

広島県の宇品港より乗船した第一次団体移住者が小樽港に入港したのが明治十七年五月十七日で直ちに小樽に上陸した。小樽から札幌迄歩いた者や小樽から銭函まで汽車に乗り銭函で下車して札幌迄歩いた者が小樽から二日もかかった者もいた。(岸本トモさんの談) 移住者は豊平の旅籠(旅館)に集結し広島開墾地からの迎えを待っていた。

豊平から広島開墾地に行くのに現在の国道三六号線(明治六年に開通)を通って大曲より輪厚川に向かって入った。途中(吉本文蔵さんの処あたり)に板小屋が建っていた。此の辺までは牛を役使して木材を搬出していたのでペコ道(牛が歩いた道)があった。輪厚川沿いに下って行くと塚本さんの附近を流れている川が馬蹄形に曲折していたのでその川にそれぞれ丸太を一本づつ渡し(後に此処を一本橋と呼んでいた)で渡り、更に下って今の大正橋の処に丸太を一本渡し(後に此処を一本橋と呼ぶ)で渡った(岸本トモさん及山本直次郎さんの談) 輪厚川が中ノ沢原野にさしかかった場所(即ち現

在村の發祥地記念碑建立の所）から川に沿って下の方に十一棟の仮小屋が建っていて十八戸がそれぞれ分宿した。これが明治十七年五月二十三日のことであった。此の仮小屋から配分された土地に沿って森林を切り倒して家屋を建て、「村づくり」が始まった。（後略）

「配分」された土地の入植開墾から北海道移住生活が始まる。その開墾生活については後年余裕が少し出来た時、話し始めるようになる。また、郷土の歴史を記録・研究する人達が出て来た。その事によってそれぞれの先祖の苦勞を知り、顕彰するようになる。その思いを北広島市誕生の平成八年九月一日に当時の教育長小野勝見氏が以下のように「一九」の紙芝居の序文に記述している。

この北広島に本格的な開拓の鉤が入って二〇余年、今日までの時の流れはいつたいどうで、どう語り継がれてきたでしょうか。

昔ばなしはその時代、時代にその土地に生きてきた人々の暮らしの中から生まれたもので、その当時の生活の歴史を物語るものといえます。

かつて北広島も、空も見えないほどの原始林におおわれていました。

北海道のこの地を新天地を定めた和田郁次郎が、明治十六年十二月に調査に入った時、猛吹雪に遭いその時二匹の狐が

道案内をしてくれた話や、太鼓の音を頼りに測量をし道路を切り開いた話、千歳川を帆掛け船でお嫁さんがきた話など、人々は北国のきびしい自然との闘いの中で、ゆたかな北広島の未来を夢見てがんばり、今日の北広島を築いてきました。

私たちは、その時々の暮らしの中から生れてきた話を一つの財産として、親から子へ、子から孫へと語り継いでいきたいものです。

この、だいじゃ神社のお話を、北広島に、むかしあったときと、子どもたちに読んであげてくだされば幸いです。

第二節 語り手とその家族

「大蛇神社」の語り手岸本トモは武田良助の三女として生まれて、明治二十四年十七歳の時、岸本謙太郎と結婚する。大蛇神社の最初の聞き手酒井喜重氏はトモ九十三歳の時この話を聞いて記録している。また、この酒井喜重氏が岸本家の状況を次のように記述している。

（義父岸本権平の移住日は明治十七年五月二十三日である。）広島県高宮郡九村の生れで農業を営み小池性を名乗っていたが後、岸本性を襲名した。明治十七年に和田郁次郎の広島村第一次開拓移住団の一員として開墾地一万坪の貸下げを受け銃を鉤に代えて開墾に精を打ち込んだ時は速に年齢五十八才の高齢であった。妻マキは三十三才、長男兼太郎は

十五才、長女トヨは九才、次男兼平は六才の五人家族を以て開墾に農耕に一致協力して家計の繁栄を築いた。

明治二十五年の頃、光顕寺建築の折り権平は建築資材集めを請け負ったところが材質厳選のため莫大な借金を背負いその返済に五年もかかった事もあった。後に神社、寺院の世話役として活躍し部落民の信望も厚かった。明治四十年九月二十三日に死亡す。

(トモの夫 岸本兼太郎は父権平の長男として) 父に連れられて本村移住地に入植したときは十五才であったが、父と共に原始林にて斧をふるい一人前の労働力を發揮した。明治二十四年に武田良助の三女トモさんと結婚し夫婦共ども農業経営に努力した。農耕に続いて早くから酪農にも励み益々家門の繁栄を築いた。大正三年より大正十年の間四期に亘って広島村会議員に推選され村の発展のためによく努力された。昭和十年一月十八日に六十五才で村民に惜しまれながら喪くなった。

岸本 トモ

妻のトモさんは今尚健在で村内唯一の古老で今年九十三才である。トモさんは武田良助の三女で安芸国高宮郡九村にて明治七年七月十七日に生れた。兄の武田与一氏は明治十六年十月に和田郁次郎氏が移住者の仮住宅建築のために連れてきた青年四人の内の一人で家族より一足先に渡道して来た。父

の武田良助、母オベン、長女ワカ、次女オトワと末の私トモの四人で第一次団体移住者の中に混じって渡道した。トモさんは遠い昔を想い浮べながら村の入植当時からの変り変わりや開墾の苦労話を懐かしそうに話してくれた。

移住者に乗せた船は三月に宇品を出航した。

船の中では移住者たちは毎日歌ったり踊ったりして楽しかった。船の弁当は重箱詰めで毎日鮭のおかずで臭くて食べられなかった。船は小樽に着き、そこから銭函まで汽車に乗りそのあとは札幌迄歩いた。豊平の旅籠屋で二日程泊まった。その旅籠屋の周囲に五、六軒の草葺屋があった。父は餅を買ってくれた。その代金は一個一銭であった。兄の与一が迎えに来てくれた。荷物を背負ったり担いだりして運んだ。

大曲から入って中ノ沢に到る途中に仮小屋(屋根が板で葺いてあった)があり其処で休み弁当を食べた。馬車(三輪車の荷馬車)に丸太を積んで赤牛(使役牛は主に赤毛の牛)が運搬していた。広島開墾地に着いたのが五月二十三日であった。輪厚川沿いに建っていた板小屋は桎葺きと草葺きがあった。土間に草を敷き並べて其の上に筵を敷いて寝床にした。醤油樽を真中から切り一つは足を洗い他の一つは顔を洗うのに使った。移住者が最初に入った仮小屋を和田小屋と呼んでいた。窓はなく、入り口には筵を吊るしてあった。入植した年に一反歩程開墾してあった(兄達が開墾した)水田に米を蒔いた。稲穂が出るころに早霜のために収穫皆無となった。満足に食べ

るものがなくフキ、オンバイロ、ヨモギ等をよく食べた。又馬鈴薯の中にオンバイロが入っており、子供心にも「オンバイロを除いて薯を沢山茶碗に入れて下さい」とせがんだことがあった。冬の夜は炭のコモ編みで一枚が一錢五厘に売れた。その金で米を買って食べた。米櫃に鍵がかかっていたので週に二、三回より食べられなかった。北海道に米が沢山あると聞いて来たのに、このような食事が毎日続いた。男達は炭焼きに出た。この年に谷川事件があった。谷川奎左エ門が三里塚で落馬して死んだ。谷川は村上孫平の甥子であった。

十一才（明治十八年）の夏、焼山（今の月寒）にバツタ捕りに父に連れられて行った。バツタは雲のように大群で襲って来て農作物に大被害を与えた。バツタ係官からバツタを入れる袋を買って一杯になるまで捕まえた。それを土に穴を掘って埋めた。父は一日働いて十八錢、子供は無賃銀、青年は二十錢の労働賃銀であった。夜はテント張りの小屋に泊まった。父は食糧として米三合と子供は一合貰ってそれを粥にして食べた。

十四才（明治二十一年）の頃、丸太の皮剥作業に出た。一日働いて七錢から八錢の労働賃銀であったが、ハサ木の場合是一本削ると八厘貰った。当時の履物はケハンにツマゴを穿いて働いた。

十七才（明治二十四年）の時、村上孫平の媒酌で岸本権平の長男兼太郎と結婚した。箆筒は兄の与一が手製で造ってく

れた箱箆筒である。結納金は五円に酒一升貰った。親からオコシとジュバンを作って貰った。結婚式の時はず段着のまま歩いて行き、媒酌人の村上は風呂敷包を背負って一緒に歩いて来てくれた。村の青年達が集まって来て、何にかにと悪戯するので嫌であった。姑のマキさんは美人で歌を唱いながら手で畑の草を掲取り、朗らかに仕事をする人であった。当時の岸本の畑には小豆、大豆、馬鈴薯など植えてあった。食事はヨモギに米を入れて食べたり、オンバイロ、ウバユリも多く食べた。又麦飯にソバ団子が主食であった。自宅から七〇〇間程離れた千歳川に鮭がのぼってくるので捕獲した。商売人から買っても鮭一本が二錢で買ひ各農家の軒下に吊るしてあった。酒一升が二〇錢であった。

二十二才（明治二十九年）、一日の労働賃銀は十錢から十五錢であった。隣家の久保と岸本の間の境界にヤチダモの老木が空虚になって立っていた。開墾する度にヨシの根や竹の根等を老木の囲りに何年も積み重ねてきた。久保はその芥山に火をつけた処約一週間に亘って燃え続けた。四日目頃から今迄赤く燃えていた火が青い火になって燃え続けた。その後老木の根元から紫色の油が流れ出てきた。久保は燃えのこりの老木に梯子をかけて空虚を覗いて見ると白骨となった大蛇が丸くとぐろを巻きその真中に五寸角程もある頭の骨がのっかっていた。久保はその骨を家に持ち帰った。或る日、江別から骨の話聞いた老人が来て大蛇の骨はオコリ（マラリ

ア病)によくきく薬であるから譲ってくれと云って来た者もあつた。「大蛇は海に千年、山に千年この世に千年いて三千年すると天界に昇つて行く」と云う物語があつた。トモ老母の話しはとめどもなく続いた。(後略)

第三章 報道機関・行政・図書館(紙芝居等の画像化)の活動

第一節 報道機関・行政・図書館の活動

次頁の図表・北広島の民間説話一覧にあるように、大蛇の数量や焼き殺されなかつたという伝承があるが、第一章第二節の文献モチーフのような内容に現在では定着している。その定着のために報道機関や行政の広報の果たした役割が大きい。その一覧(見出しのみ掲載)は次の通りである。

- 「広島ジャーナル」一九七六(S51)年五月ひろしま昔ばなし 大蛇神社 大谷義明
- 「北海道新聞」一九八七(S62)年一〇月二三日 郷土のおはなし 水彩で描く 紙芝居で夢を 想像膨らむ五作品 「大蛇神社」など子ら大喜び
- 「北海道新聞」一九九二(H4)年八月一五日 郷土の昔話を絵本に 町教委「講座」親子で紙芝居製作へゆかりの地巡りまずバスツアー 【大蛇のたたり】

- 「報知新聞」一九九四(H6)年九月 北海道おもしろこぼれ話 タモの太木に住む大蛇の呪い 広島・大蛇神社の由来 神木伐採の祟り
- 「広報きたひろしま」一九九五(H7)年三月一日号 ひろしま あのことろ(特別編) 大蛇神社
- 「北海道新聞」一九九六(H8)年一月二二日 企画、執筆から挿絵まで 絵本 私たちが手作り 郷土題材 子供も協力 市制施行記念、秋に完成
- 「北海道新聞」一九九六(H8)年二月一日 郷土絵本づくり 子どもたちの手で原画作成
- 「広報きたひろしま」一九九六(H8)年九月一日 北広島の民話 だいたいじゃ神社*カラー刷り二頁
- 「北海道新聞」一九九七(H9)年一月一日 絵本で残せ 地元の伝説「だいたいじゃ神社」が完成 小学生に挿絵任せ
- 「北海道新聞」一九九七(H9)年九月二三日 北広島の昔ばなし 村人を悩ませたのろい 大蛇神社 一九六一年の洪水で流されて今は標柱が残っているだけ……
- 「北海道新聞」一九九八(H10)年九月三日 大蛇神社跡に記念碑 一五日に除幕 郷土の伝説にも登場 北の里の農家
- 「読売新聞」二〇〇三(H一五)年一月一日 ふるさと探見 大蛇神社 伝説残した開拓期の祠

作成：荒木 順子・(阿部敏夫)

[6] あの世からのことづけ 松谷みよ子著 1985 (S60)	[5・9] 北海道昔ばなし (道央編) 1989 (H元)	[16] 北の里のあゆみ 1996 (H7)	[13] 郷土絵本づくり (採話) 1996 (H7)	[18] 北広島のあゆみ 1997 (H8)
明治 20 年代				
	武右工門の土地	久保武右工門・岸本槽 平の土地の境界	岸本・久保の境界	久保・岸本の境界
加藤好江 (北広島在住)	加藤好江 (北広島在住)		渡辺忠・一子(北の里在 住)	
大人 3 人が手をまわすほ どの大木	樹 齢 100 年、直径 2m、 タモの木	ヤチダモの老木	タモの木	直径 2m のタモの木
			明治 23 年頃	明治 30 年頃
持主の男	武右工門	左同		武右工門
左同	左同 7 日 7 晩燃えた	左同 約 1 週間	1 週間ぐらい泣き通し た (一子)	1 週間燃える・5 日目 に色が変わる
左同	左同	左同	焼き尽きたら蛇の骨が あった	頭 15cm
	武右工門 (一部を)	久保武右工門 (ほとん ど)		
			恵庭の人がぐすりに灰 をもらった	
		久保武右工門の屋敷の 河川敷地内		タモの木のそば
	村人と一緒	流田辰次郎が中心	流田辰次郎	村人
	火をつけたその夜から枕 もとに女が現われる。様 子は同じ		助けて下さい。火を消 して下さい (山田基工 門の話聞いた大谷)	1. 長い髪の女の 人 2. 髪をふり乱した人 3. 髪が抜け落ち、皮膚 が垂れ下がった老婆 4. 白骨の姿
			蛇の神社→大蛇神社	
		渡辺市郎兵衛	渡辺家	
	昭和のはじめ (洪水)	昭和 36 年 7 月 24 日 (洪 水)	昭和 36 年 (洪水)	昭和の始めの洪水 (ホ ロンベツ川)
久保さん不運が続く	・ 3 人の息子が原因不明 の病で死亡する	・ 子どもの不思議な病	・ 昭和 6 年建て直し (藤 坂さん 74 歳) 小学校 4 年生の頃	・ 久保さんの息子 3 人 が不思議な病にかかる
「大蛇を焼く」	・ 次の地主作次郎は牛や 馬が次々死亡	・ 渡辺忠 (四代目) 馬 の怪我、乳牛の繁殖に 不運が続く	・ 白蛇の話 渡辺さん の祖母の話 (岸本トモ さんからきく)	
	占師のことばに従って畜 舎を改造		その木が燃えてなくな ったら、白蛇もいなくな った。	
	神主におはらいをしても らった		・ セトモノの白蛇のお 観音さんを座布団に置 いてお参りしていた(一 子)	・ 渡辺さん 占い師に 相談。家畜舎を改造。 神主に「おはらい」 をしてもらいました。
	作次郎→当時未だ本名を 書ききれなかった		・ 牛や馬が次々死亡。 占い師に相談。酒とタ マゴを供えてお参りし た。	

紙芝居『だいじゃ神社』（広報「きたひろしま」1996.9.1）



第6場面



第1場面



第7場面



第2場面



第8場面



第3場面



第9場面



第4場面



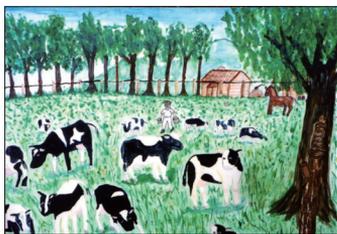
第10場面



第5場面

第二節 図書館（紙芝居等の画像化）の活動
 図書館を中心とした紙芝居・挿絵等の画像化作業を通して北
 広島地域の中でさらに「大蛇神話」話はイメージ化されて行っ
 た。第一章の「二二」の話と前節の「二二」の報道記事と二つの紙
 芝居作りを通しての画像化の活動が連動して伝説が創り出され

て行った。次に前節「八」の紙芝居の画像を転載し、伝説作り
 果した役割を見たい。紙芝居は北広島市制記念として、小学生
 一六名が内容・絵描きを分担して完成させたものである。五百部
 作製され、北広島市内の各小中学校や中央公民館・図書館、各地
 区会館図書室などに配布され、郷土学習の資料となった。



第16場面



第11場面



第17場面



第12場面



第13場面



第14場面



第15場面

終りにーまとめー

一、広島県から移住した人達が開墾した頃の苦勞を百年後になって語った事が伝説生成の始めである。村の札幌市のベッドタウン化による激変、生活の安定、過去への郷愁と次代への継承心がこの伝説を生じた。

二、伝説は大谷義明氏、荒木順子氏、文学者、図書館関係者、行政当局、新聞社をはじめとする人達が関与して伝説は地域住民等に広められ、図像化され、内容が創りあげられて行った。

三、住民意識形成に関わって、新聞や市広報紙上での紹介記事の果たした役割は大きい。「北海道新聞」「報知新聞」「読売新聞」「ひろしまジャーナル」「広報きたひろしま」等に合計一二回掲載されている。

四、紙芝居が二種類創作されている。一つは大人創作のものである。それは大蛇の慰霊（祀信仰）で終わっている。それに対して小学校生

一六名が参加している紙芝居は、慰霊後牛飼いで生活も豊かになり、大蛇も龍になって天に昇ったという感謝型（記念碑）になっている。後者は子供達の想像力と教育的配慮が紙芝居の背後に働いている。同時に、この感謝型は、石碑を建立した渡辺忠氏の思いでもある。

五、大蛇が移住開墾期に焼き殺されたという事実と開墾の厳しさの中で起きる不幸が結びついて伝説が、郷土史家・図書館関係者・文学者等によって「繰りかえし」語られ、記録化され、画像化等されて行く中で伝説がいくつかの姿を含みながら伝承されて来た。その期間は一九七二～二〇〇五年の約三〇年間である。

また、伝説伝承は△語り・□承▽↓△読み・書承▽↓△読み聞かせ・□承▽そしてネット化（図書館）というように同時並行に継承されている。

六、岸本トモの酒井喜重に語った話が、大谷義明によって岸本兼松・山田甚工門の話を加味して大蛇の霊が夢枕に立つというようになる。内容が詳しく描写されるようになり、それが絵本・紙芝居というようになるに従って内容が膨らんでいる。個人等の関与の大きさを認める事が出来る。

七、村落形成の原動力になったのは共同体意識である。厳しい自然とのたたかい、家族の健康、後継者育成、精神的支えを維持する事が出来た人々が今日の繁栄を勝ち得た。さらに心ならずして窮地に追い込まれ離村せざるを得なかった

人達も含めて個々の状況を探り、民間説話の生成・変容・定着の問題を今後考察しなければならない。

八、北海道外（特に広島県等）の大蛇信仰と北広島の大蛇信仰との関連に関する考察は今後の課題である。

九、また、北海道の民間説話の成立する村落共同体形成の問題は、祭祀の視角だけではなく民俗芸能・都市民俗学の成果等の視角をも含めて今後考察して行かなければならない。

参考文献

・『国文学 解釈と鑑賞』第七〇巻一〇号「特集 創られた伝説」二〇〇五

・荒木博之、野村純一、福田晃、宮田登、渡邊昭五編『日本伝説大系』別巻一・二 一九八九・一九九〇 みずうみ書房

・倉石忠彦『都市民俗論序説』一九九〇 雄山閣

・野村純一編『昔話伝説研究の展開』一九九五 三弥井書店

・堤邦彦、徳田和夫編『寺社縁起の文化学』二〇〇五 森話社

・吉野裕子『蛇 日本の蛇信仰』（ものと人間の文化史三二）

一九七九 法政大学出版局

・笹間良彦『蛇物語 その神秘と伝説』一九九一 第一書房

・阿部真司『蛇神伝承論序説 清姫の原像を求めて』一九八六

神泉社

・前野雅彦『伝承される開拓』『日本民俗学』第二四八号 二〇〇六

（あべ・としお／北里学園大学）